

精神障害者ジョブガイダンス受講者の心理プロセス

Psychological process of mentally handicapped persons taking a guidance for work

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 学籍番号 1000-100712 武士志歩

指導教員 長田由紀子教授 提出日 平成 24 年 1 月 19 日

1. 問題

わが国の精神疾患の患者数は近年急増し、厚生労働白書（平成 22 年度版）によれば 2008（平成 20）年には 320 万人を超えている。国は、精神障害者が地域において本人が望む生活を安心して送ることができるよう支援する体制の充実が喫緊の課題であるとしている。

なかでも就労は、その中心的な課題のひとつであり、2006 年に施行された「障害者自立支援法」は就労支援の抜本的強化をその基本理念にうたっている。現今の雇用情勢は厳しく、経済成長に伴い減少していた生活保護受給世帯数は近年増え続け、戦後の混乱期に次いで過去 2 番目の高い水準となっている。国の財政もまた、年々逼迫しており、わが国にとって雇用の問題、なかでも支援があれば働ける可能性がありながら、働いていない人の問題は、税収に直結するだけに大きいといえる。

就労支援の施策のひとつに精神障害者ジョブガイダンス事業がある。この事業は、厚生労働省が平成 19 年度から実施しているもので、その目的は、医療機関等を利用している精神障害者および発達障害者の雇用への移行促進である。就職意欲は高いが就業のための準備が整っていない、就職できる可能性は高いが就職活動に伴う不安や緊張が高く就職やその継続が困難な方を対象として、公共職業安定所（ハローワーク）の職員が医療機関等を訪問し、求職活動の方法などについてガイダンスを行う。このように就労支援の重要性が認識され、時代の趨勢やわが国の文化に合う就労支援施策が求められるなか、各機関の連携やネットワークの必要、支援技術の開発に関する研究はあるが、就労支援を受ける側の心理プロセスはまだほとんど研究されていない。

2. 研究の目的と意義

本研究では、精神障害、発達障害を持つ人を対象とした精神障害者ジョブガイダンス事業の受講者が、その過程でどのような体験をし、その体験をどう意味づけているのか、他の参加者や支援者、また家族との関係はどう変化するのか、就労の意味をどのようにとらえ、何を困難に思い、自らの障害をふり返り、それらを位置づけて行動していくのか、その心理プ

プロセスを明らかにすることを目的とする。それらをふまえ、わが国において精神障害、発達障害といった困難さを抱えながら就労を目指す人について深く理解し、より適切な就労支援のあり方について検討したい。この研究は、支援者の個人的経験に頼って行われる傾向がある就労支援を構造化しつつ、わが国の文化に沿い、同時に個別性を尊重する取り組みへ進化させるための基礎的な情報を提供し得る研究として意義があると考えられる。

3. 研究方法

研究対象者は、精神科デイケア利用者のうち、主治医の許可を得ている平成 23 年度精神障害者ジョブガイダンス事業への参加者 10 名、研究期間は 2011 年 8 月～2011 年 11 月である。研究対象者に対して、働くことの意味や、就労について家族から言われること、困難に思うことなどの 8 個の質問を含めた半構造化面接を各回 5～15 分程度実施した。

分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。分析焦点者を「精神障害、発達障害を持ちながら就労を目指す精神障害者ジョブガイダンス受講者」、分析テーマを「精神障害者ジョブガイダンス受講者が、集団就労支援プログラムに参加する体験に基づく感情や、関わり、気づきを通して就労を人生の中に意味づけていくプロセス」とした。

4. 結果

2 個のコアカテゴリー、4 個のサブカテゴリー、11 個の概念を生成した。ストーリーラインは以下の通りである。なお、図や文中ではコアカテゴリーは太字、サブカテゴリーは【】、概念は<>で示した。

ストーリーライン

精神障害、発達障害を持ちながら就労を目指す精神障害者ジョブガイダンス受講者は、参加の前提として、働きたいという意欲を持ち、内的には働くことを【自分の裁量でやっつけられること】としてとらえ、それは経済的な自立や家族の一員としての役割を果たすことを含む<人間として当たり前のこと>であると位置づけている。障害を持つことに伴う体調管理の不安や、体力づくりをすることといった相補的な関係にある事柄についても、就労準備のひとつとして<自分でバランスをとっていける>こととして、ある程度努力により制御可能だと意味づけている。また、障害を持ちつつ自分が働くためには、資格がない、労働条件が合わない、採用されないなどの様々な困難があるが、それらの<不利を承知でいる>。

一方、外的には、家族や支援者から、言語的、非言語的な種々のメッセージを受け取っている。そのメッセージに応じて<ありのままにいられる><能力がないと感じる><ありのままにいられない>などの様々な感情を【手探りで感じ続ける】。そして同時に、この状態の

根底では常に、働きたいという**希望を持ち続ける**。

精神障害者ジョブガイダンスという集団就労支援の場に参加し<他の参加者との出会い>という経験や支援者との関わりを持つと、場の設定の労をとってくれたことや話を聞いてもらったことに対し<関わってくれて嬉しい>という感情が喚起される。これは就職活動、および厳しい雇用情勢という現実と向き合っていく上で<努力を続けられる>原動力となり、自分を<奮い立たせる>。支援者や<他の参加者との出会い>はまた、体験を通して<自分の可能性に気づく><味方がいると気づく>という二つの気づきを促し、ジョブガイダンス受講者は他者との出会いの体験を経て【自分と出会い直す】。この現象は**希望を持ち続ける**という意志の継続の支えの基で、**自分の価値を再発見する**ということにつながり、一連の過程は常に円環運動となって繰り返され、前進していく。

5. 考察

精神障害、発達障害を持ちながら就労を目指す精神障害者ジョブガイダンスの受講者は、プログラムの受講以前から、一人の人間として働きたいという希望を失わずに持ち続けている存在である。働くことは自立や役割の遂行という意味を含み、自らの努力の及ぶ範囲の事柄であると自覚している。この動機は当該就労支援集団プログラムへの参加の過程で、他の参加者や支援者との相互交流における様々な気づきや感情の喚起を通して強められ、受講者は一連の他者との出会い経験を繰り返して、自分の価値を再発見する。

受講者の心理プロセスは主として二つの軸によりとらえられる。ひとつは当事者と他の参加者、支援者との相互交流による軸であり、もう一つの軸は、ジョブガイダンスプログラム参加の前提でもある「働きたい」という強い思いである。この二つの軸は相互に交差し、相互に交流、循環しながら前進していく。

この研究により、次のような援助の視点が得られた。まずひとつは、支援者の態度、姿勢に関わる視点である。支援者の「相談には乗るが、具体的に共感して指示をしない態度、姿勢」は、むしろ当事者が一個の人間としてその尊厳を思い起こし、ありのままでいられる状態を作り出す。そしてそれは、当事者が「働きたい」「自分は働ける」という就労への希望を持ち続けることのゆるがぬ基底となる。またこの支援者の姿勢は、当事者とその家族との関係にも照らし返される可能性がある。つまり、支援者との関係においてありのままでいられる体験をした当事者は、家族から発せられた言葉について、否定ではなく肯定的なメッセージを受け取るように変容していく。ふたつ目の視点は、個別支援だけではなく、集団プログラムへの参加による他の参加者や先輩ピアとの出会いが、当事者の潜在的な可能性を引き出

すということである。就労の進み具合についての本人評価のインタビューにおいて、もっとも評価を上げる影響があったプログラムはジョブガイダンス4回目の「会社見学」であった。なかでも実際に障害者枠で働いている当事者との質疑応答を経た後の動機づけの向上は自分の可能性に気づくという概念の生成、および自分の価値を再発見するというカテゴリーの生成に影響した。

6. 結論

集団プログラムへの参加による仲間との出会いと相互交流、個別就労支援における支援者との関係という二つの事柄は、その時点での就労の有無や就労経験に関わらず、ともに両輪となって当事者の就労および働くことへの希望を、その根底において支えている。

以上